

羽口の渡しの呼び方は「はくち」か「はぐち」か「ばくち」か「ばぐち」か？
(オンラインミーティング番外編)

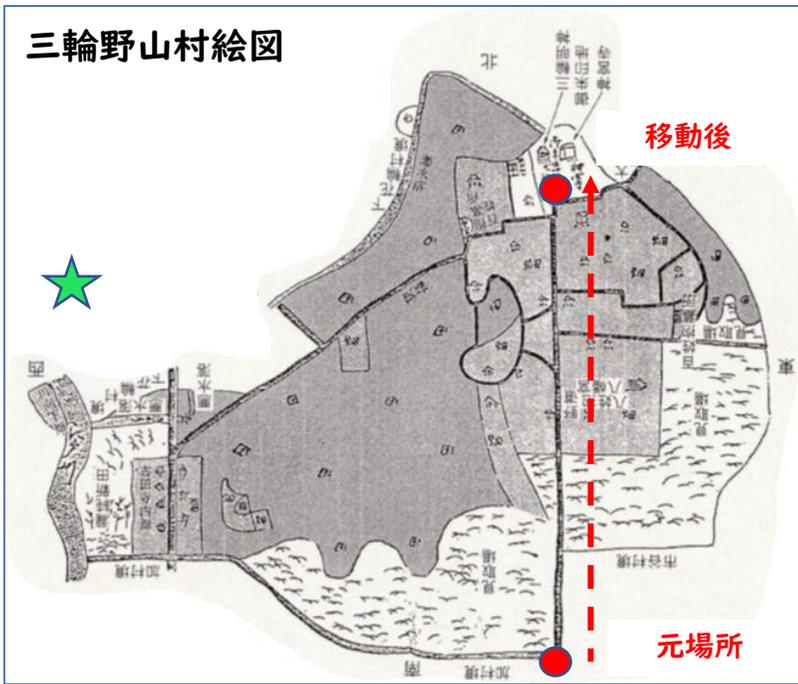
古来、三輪野江の渡しと呼ばれていたが、江戸川の直線化に伴い羽口の渡しと呼ばれるようになったと思われる。羽口は土手を築く際、強度を増すために盛土の間に葦の葉や竹笹、俵などをすき込む工法。土嚢を斜面に重ねる工法もある。鳥の羽口に見立てたことから呼ばれたという。呼び方としてはハクチとも濁音のハグチ、バクチとも呼ばれていたと考えられる。一方バクチ説は近くに船頭のたまり場があって、船頭たちが博打をしていたからバクチの渡しと呼んだという。しかし言い伝えでエビデンスはない。そのような中に参考資料が提示された。

オンラインミーティングで、証文土手が検討されたことは連絡の窓に投稿済みであるが、資料収集者(佐藤茂晴)から『流山庚申塔探訪』の資料が提示された。それは道標庚申塔で、元は三輪野山と加と市野谷の境にあった(現在は茂侶神社)もの。

享和三年、三輪野山、東我孫子道、南小金町、西馬口道とある。西に向かえば江戸川に突き当たり、堤防を北上すると羽口の渡しに至るから、その「みちしるべ」と解釈できる。馬をハとは読まないから、馬口はバクチまたはバグチと呼ばれていたと考えられる。また、馬口の意味は馬の出入り口の意もあるから、ここの渡しは上流の渡しのように、冬場における対岸からの農耕馬の受け入れ渡し場であったと考えられる。(資料参照)

以上のことから、現在は堤防の工法から羽口の渡しとされているが、江戸時代は馬の渡船場から馬口の渡しと呼ばれていた。発音は「バクチ」または「バグチ」と思われる。呼称は複数の理由が合わさって呼ばれる場合もあるので、必ずしも漢字が重要視されたわけではない。また、言い伝いの博打場があったから「バクチの渡し」と呼ばれた説は信憑性に欠ける。もともと農作業を中心とした渡船場では、多くの船頭を擁したわけではなく賭場があったとは考えにくい。おそらくバクチの発音から後付けされたものでしょう。

三輪野山村絵図

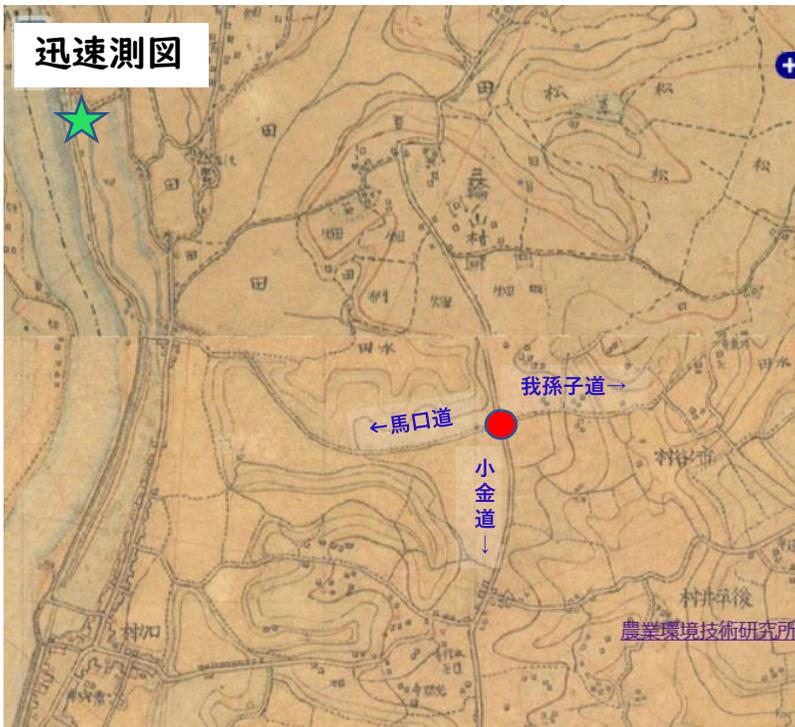


道標庚申塔



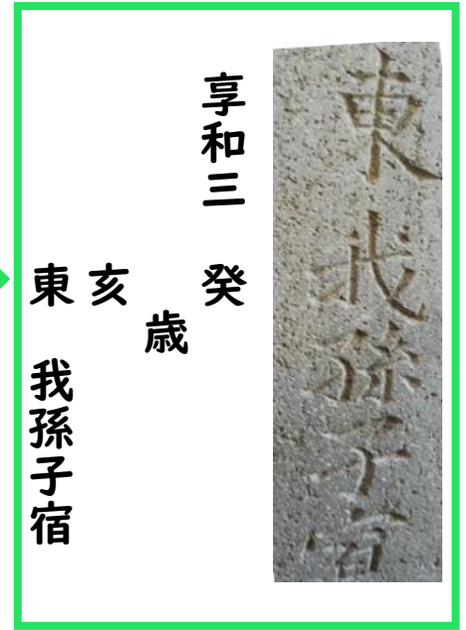
羽口の渡し跡

迅速測図



現在国土地理院地図





見ザル
聞かザル
言わザル

- 三輪野山村
- 松田文蔵
- 小谷与茂八
- 北浦市蔵
- 鈴木彦三郎
- 同 宇八
- 同 兵蔵
- 大竹茂八
- 中村松五郎
- 同 要蔵
- 木崎山右衛門
- 立原仙蔵
- 同 久蔵
- 古市増吉
- 加藤祐吉
- 堀江吉五郎
- 同 利八
- 同 由太郎
- 鈴木嘉七